

MALVERN CENTRAL SCHOOL 授業見学報告

見学者：中野真規子・早川直子

記録者：早川直子

2004年3月17日（水）9:45-14:00

1 MALVERN CENTRAL SCHOOL について

地区の中では比較的恵まれた子供たちが通う学校*1。日本語のクラスは Pam 先生と布施先生によって各組に対し一週間に一度行われる。Prep クラス, 1・2年生クラス, 3・4年生クラス, 5・6年生クラス, 7・8年生クラスに分かれ, それぞれがまた25人前後の4~6組に分かれている。クラスは2学年の合同であるため, レベルに差が出てしまうのは避けられない。授業は主に Pam 先生の専用の教室で行われ, 生徒達は床に座りながら非常にリラックスした状態で参加するが, 行儀の悪い生徒は厳しく注意される。教室には座卓, 座布団, 日本の絵本, むいぐるみ, 色鉛筆, PC4台, その他色鮮やかな絵で飾られ楽しそうな雰囲気に溢れている。

1.1 Level 3-3 — 4年生クラス (10:00 — 11:00)

1. Pam 先生による自己紹介の練習。「なまえはなに」「なにがすき」などの導入。文字はホワイトボードに書かれた。何組のペアが前へ出て練習した。
2. 布施先生と依頼の表現, 「どうぞはいつて」「たって」「すわって」などを練習。5人の生徒に前へ出てもらい, みんなの方を向いて1列に並んで座らせる。先生が1人の生徒に依頼の表現をささやき, その生徒はとなりの生徒にそれを伝えるという伝言ゲームのような形。その間先生は見ているみんなに正解をカードで示す。最後の生徒まで伝わったら, 5人は手元の表現が書かれているカードを一斉に上げる。ゲームのように楽しく学べ, みんな前へ出たがっていた。

*1 Spring Road, Malvern 3144
<http://www.malvern-central.vic.edu.au>

1.2 Level 1 — Prep クラス (11:30 — 12:00)

日本語で歌を歌ったり、踊ったりするクラス。Pam 先生の教室ではなく、別棟 (Park St 沿いの校舎) の広い室内で行なわれた。4 組合同で、それぞれの先生も参加し、大人数で行なわれる。歌詞の中に出てくることばの意味を英語で確認させることもあった。5,6 曲練習 (途中で退室)。

1.3 Level 3-3 — 4 年生クラス (12:30 — 13:30)

東京都北区の堀船小学校とのビデオ会議システムを使った遠隔授業。

1. 「げんこつ山のためきさん」「田中さんの牧場で」を歌ってウォーミングアップ。歌詞に出てくる日本語の動物の鳴き声も紹介。
2. 今回の遠隔授業について Pam 先生から説明。簡単な自己紹介のあと、絵の描かれたカードを「これはなんですか」と相手に見せ、質問をするという段取りを理解させる。男の子なら自己紹介時に「ぼくは (名前) です。」という言うよう教える。次にカードに描かれたものの名前 (男の子、女の子、犬、猫、ネズミ、風船など) を導入。相手に話す時はゆっくり正確に話すよう繰り返し注意した。
3. AJ-PIE (Australia Japan Peer Internet Exchange) のディレクター野田さんがセットアップした PC で遠隔授業開始。堀船小学校の矢部先生の生徒が相手。2 台を使用し、1 台に 2 人ずつがペアになって参加。東京の小学生もペアになっているため 1 台の PC で 4 人が顔をあわせる。一組 10 分弱で自己紹介 → 絵に描かれたものの名前を日本語で尋ね、日本語で答える → 別れの挨拶という流れで進め、今回は 15,6 人が参加し、最後にみんなで日本語の歌を歌って終了。

2 見学の感想

この Malvern Central 小学校のように語学教育を勉強と意識する前に、外国語に歌やゲームなどで触れ、実際にその言語を話す子供と交流をする機会があることは、子供たちの国際感覚を養うのにいいのではないかと感じた。

遠隔授業を体験した児童が父親の日本出張についていき、実際に遠隔授業をした相手校を訪問して自信をつけて帰ってきたという事例を伺うことができた。授業後、児童の一人が Pam 先生に外出先で聞いた日本語のアナウンスがわかったと報告する姿を見かけた。実験的に始められた日本との遠隔教育プログラムが、日本語に対する精神的なフィルターをさげる役割、自然な国際感覚の育成、多文化理解への橋渡しをしているのではないかと見学を通して感じた。 (中野)

今回の遠隔授業を参観して、幼いときに外国の同世代の子供と話すということが語学学習の強い動機づけとなっていくその例を見たような気がした。

小学生たちはコンピュータの画面を通して人と対面する楽しさを大人以上に感じているようだった。3・4年生クラスということもあって、中には相手とのコミュニケーションそのものよりも、システムのおもしろさのほうに興味をもつ生徒もいた。また音声クリアでなかったために、話の途中にもかかわらず「バイバイ」と会話を終わらせる生徒もいた。

このようにコミュニケーションやシステムのトラブルがあった場合、子供なので場つなぎの会話ができず、誰かがそばについてないと問題を解決するのはなかなか難しい。Pam先生によると、会話を続けることは3年生にはまだちょっと難しいが、約1年後の学年

の終わりになれば、相手の質問にきちんと答え、コミュニケーションがとれるようになっていくそう。システムのトラブルには複数のコンピュータを使っているため、野田さんお一人では対処できないこともあるだろう。システムのサポートは野田さんのほかに学校のICT（Information Communication Technology）という機関が入っている。

他の授業の参観も含めた全体的な感想は、リラックスした雰囲気の中で楽しく歌ったり話したりして、「日本語を勉強している」というような固い印象は受けなかった。

小学生という段階では日本語を勉強するというより、日本語に触れ、日本語と仲良くなることが重要なのだと感じた。

（早川）